

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24242026

研究課題名(和文) 現代のおよび世界史的視点からみた日本の戦歿者慰霊に関する総括的研究

研究課題名(英文) Summary research on the Japanese war memorial from a contemporary and world history point of view

研究代表者

檜山 幸夫 (HIYAMA, YUKIO)

中京大学・法学部・教授

研究者番号：40148242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の戦歿者慰霊の特徴について、その表象物である戦争記念碑という「もの」資料を基に分析したものである。その結果、日本の戦歿者慰霊は、自由民権運動における国権論的思想を基にした国民主義による旧藩ナショナリズムと地域アイデンティティによるもので、その起点は西南戦争という内戦で戦死した股肱の臣を忠臣慰霊とした下からの愛国主義運動にあったこと、これが日清戦争による全国的に展開されていくことによって日本の戦歿者慰霊のかたちとして形成されていったこと、そしてこのような下からの愛国主義運動による戦歿者慰霊というのは世界史的には一般的なものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the peculiarity of the Japanese war memorial by examining its most representative material sources -i.e. war commemorative monuments. As a result of this research, it emerged that Japanese war memorial is the product of a regional identity and of a nationalism of the ancient feudal times created by a democracy based on the sovereign rights theory of the democratic rights movement. Japanese war memorial dates back to the Satsuma rebellion, where the commemoration of right-hand men who lost their lives in this civil war shows a bottom-up patriotism. This movement developed to a national level during the first Sino-Japanese and it gradually formed the Japanese style of the war memorial. Finally, it shows that this type of war memorial created by a bottom-up patriotic movement is a typical pattern worldwide.

研究分野：歴史学

キーワード：戦歿者慰霊 戦争記念碑 国家記念碑 靖国神社 戦歿者墓地 軍人墓地 戦争の記憶 「もの」資料

## 1. 研究開始当初の背景

(1)日本における戦歿者慰霊についての一般的な理解は、慰霊施設の一つである靖国神社・護国神社に集約されてきており、そこでは国家による慰霊を基本軸とする考えが多く見られた。一方、歴史学界では、靖国神社・護国神社から営内神社といった神道系慰霊施設や陸軍墓地などの軍用墓地といった天皇・国家・軍隊を軸にした研究、戦争と軍隊を支えた人々を中心に置く社会史的視点からの研究や文学・絵画・映画・報道といった社会文化史的視点からのアプローチがなされ、多くの成果が挙げられてきた。しかし、そこにおいて解明できていない大きな疑問があった。それは、近代の戦争の特徴は、国家が勝利した戦争を記念する施設とその戦争で戦死した兵士を讃える施設、そして戦死者を埋葬する施設を設け、国民統合の手段としてきたことにあるが、日本ではそれが貫徹されてきていないということにあった。そもそも、靖国神社が注目されるようになったのはA級戦犯の靖国合祀からであり、国民の靖国神社に対する関心もその頃からで、従って日本においては靖国神社が国家の戦歿者慰霊施設であるという理解は一般的ではなかった。しかし、日本人は日清戦争以降太平洋戦争まで多くの人々が戦争に関わり多くの兵士が戦場で斃れ、たくさんの人々が戦災で亡くなっている。このため、戦死者を祀る施設も葬る施設も、彼らを讃える記念碑も各地に造られさまざまな儀式も行われてきた。それにも関わらず、1945年まで、我が国には戦死者を埋葬する国家の墓地も戦死者を慰霊する国家の施設も戦捷を記念する国家の記念碑も造られることはなかった。戦争記念碑や戦歿者墓地が国民の統合の道具であるという一般的定義からすると、日本における現象は異例なものとなる。本研究を企画した背景には、かかる特異な現象が何故起こったのか、それは日本の特徴であるのか、その原因はどこにあるのかを探ることにあった。

(2)日本は、明治維新によって新しい国家、天皇制国家が誕生したが、これを記念する記念碑や記念施設も造られていない。造られたのは、そこでの戦死者を祀るために天皇が東京招魂社を、藩主が招魂社・旌忠社であった。それは、天皇が股肱の臣の霊を祀るものとして、又君主が忠臣の霊を祀るものとして造られたものであって国家慰霊という考えではなかった。その後、最初の海外出兵となった征台の役も、最大の内戦となった西南戦争も、東アジア世界の覇権を握った日清戦争も、また日本の国際的地位を大きく上げた日露戦争も、さらには世界の大国として国際的地位を確保した第一次大戦でも、国家として乃至は国家的規模のものとしての戦捷記念碑も記念施設、全ての戦死者を祀る墓地も造られては来なかった。だが、日本に戦死者を埋葬する墓地がないわけでも、戦捷を記念する記念碑や記念する施設がないわけでもなかつ

た。それどころか、多くの地域には戦歿者墓地や軍人墓地、日清戦争・北清事変・日露戦争・第一次大戦などの記念碑が町村単位の規模で全国に造られている。また、戦死者の霊を慰霊する施設としては各地に地域共同体の戦死者を祀る仏教式の忠魂堂・忠霊堂や神道式の招魂社が、全仏教徒の戦死者を祀る善光寺忠魂堂といったものが造られていた。しかも、それが国民の愛国心を培い国民を統合する手段となり国民を戦争に動員する役割を果たしてきた。それにもかかわらず、戦歿者慰霊研究や戦争記念碑研究では、何故に日本では国家的規模での墓地も記念碑も造られてこなかったのかといった、基本的な問題が明らかにされてこなかった。

(3)戦後70年を控えて問われていたのが、如何に過去と向き合っているのか、向き合っていくのかであった。つまり、過去の歴史を如何に理解していくかであった。それは、最終的に戦後を終わらせることに繋がるが、それを達成するための道を如何に探るかにあった。だが、実際的な問題として問われていたのは、中国や韓国からの「歴史認識」の問題であり、日本における議論もこの「歴史認識」問題に集約されていく。しかし、過去と向き合うということはこれだけではない。「日本と戦争」という視点と同様に、「戦争と日本」という視点も重要である。果たして、日本人は戦争とどのように関わりあっていったのか、それが戦後の日本人の意識にどのように作用してきたのかといった視点からの「過去との対話」の解明が必要になる。

(4)戦前の日本では国家が戦歿者墓地を造らず、戦勝記念碑も戦捷記念施設も造らずにいるにもかかわらず、国民は積極的且つ自発的に、しかも無数の戦歿者墓地や軍人墓地を造営し、戦争記念碑や戦捷記念碑はもとより従軍記念碑から忠死軍人碑・忠魂碑・忠霊碑・招魂碑を建立してきた。この落差は何であるのか、何故このような落差が生まれたのかという問題を含めて、同時代の日本人がそれをどのように理解しどのように向き合いかかわってきたかを解く必要がある。

(5)一方、戦前とは全く違った様相を示している戦後は、戦争記念碑は平和祈念碑に、忠魂碑・忠霊塔は慰霊碑となっただけではなく、遺族会や各種団体・関係者などにより慰霊碑が建立され、各市町村には遺族などにより戦歿者墓地や軍人墓地が造られ、千鳥ヶ淵には国立の戦没者墓苑も造られ、さらには政府主催の全国戦没者追悼式や市町村や遺族会単位による戦歿者慰霊祭が非特定宗教的乃至は非宗教的にしかも死者を追悼し平和を祈念する催しとして行われてきた。それが、過去と向き合う戦後の日本人の姿であった。だが、歴史学界での研究では、それを必ずしも高く評価することもなく、そこにある事象を分析し戦歿者慰霊と戦争記念碑の研究として捉えることもなかった。それが、国民の意識との乖離を生み出してきたということが

理解されていない原因であろう。

(6)それは、さらに戦歿者慰霊施設や記念碑にかかわる論争にみられるように、それらの論争に一般の国民の存在がないことにある。この普通の国民の存在、普通の国民が築いている景色が見落とされていることが、今日の戦争記念碑論争や戦歿者慰霊論争のもっとも大きな問題で、その潮流のなかにある歴史学界における論争も同様の問題を抱えているといえる。一般的な戦歿者慰霊と戦争記念碑の研究手法の多くが、特異な事例や特徴的な事例を基に行うということにある。確かに、歴史研究というものは、歴史学の宿命でもある残された記録に依拠せざるをえないことから、普通の状態、一般的な事象というものは見落とされがちになる。それは、多くが普通の状態や一般的な事象はそれであるが故に記録されることもなければ伝承されることもないからで、そもそも分析検討する素材として存在してこなかったからでもある。だが、戦争記念碑や戦歿者慰霊とは、一般の国民が普通に行ってきたり造ってきたものであり、戦争記念碑と戦歿者慰霊の研究とはそれを研究することにある。その観点から捉え直すと、現在の戦争記念碑と戦歿者慰霊をめぐる論争が如何に国民の理解とかけ離れているかが判る。

(7)一般国民の意識を理解するためには、国家・軍隊・戦争・戦死・慰霊について、日常的に行われている行為や、普通の人々が書き残してきた記録や残してきた物、現存している戦争記念碑・平和祈念碑や忠魂碑・慰霊碑、共同墓地などに造られた軍人墓地・戦歿者墓地や戦死者墓碑・戦歿者墓碑といった、普通の情景とでもいうような事例を基に研究することであろう。本研究が「戦争記念碑と戦歿者慰霊」に重点を置いたのは、このような研究では両者を切り離して分析するべきではないと考えたからであるが、さらに世界史的視点という一国的分析ではなくグローバルな視角からの分析を行ったのは、このような一般的で普通の情景ともなっている日本の戦歿者慰霊と戦争記念碑は中国・台湾などの東アジア諸国などからみると特異なものではあっても、ヨーロッパ諸国などでは普通にみられるものであることから、そこにある普遍的な原理を明らかにする必要性があると考えたからである。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の戦歿者慰霊について、日本人と戦争を主題に社会文化的視点から国民の意思を表明している戦争記念碑と戦歿者墓碑を基に実証的に解明するものである。そもそも、国民国家における戦争記念碑と戦歿者慰霊は、国家にとっては国民統合の政治的手段の一つであるが、国民にとってはその戦争に対する意思を表示する行為の一つであるため、国民と戦争の実相を表象していることから、日本近代史研究にとっては重要な研

究課題となっている。だが、戦後の歴史学研究は史観や固定観念に拘わり慰霊の実態すら把握しきれず依然としてその本質を解き明かしきれしていない。このため、本研究では国民と地域社会の視点から、明治以降現代までを包括的に捉え、戦前と戦後との非連続性・継承と否定、国家と地域社会における個別と全体、世界史的視点からの独自性と普遍性から問い直すことによって、日本的戦歿者慰霊とはどのようなものであるか、我が国の戦争記念碑の嚆矢はいつからなのか、それは何を意味するのか、我が国における戦歿者慰霊の特徴とは何であるのか、それらを国際比較のなかで解明することを目的としたものである。

## 3. 研究の方法

(1)研究の基本は、文書及び文献資料・新聞などの情報系資料の収集と関係者からの聞き取りといった通常の調査を前提としつつも、それらの実態を詳細且つ正確に把握すること、特定の象徴的事例ではなく多くの一般的な事例を精確に収集しそれを基に客観的・科学的に分析すること、記念碑などの非文字史料では碑石に刻まれている全ての文字情報を収集記録することにある。つまり、研究の基盤は飽くまでも現物資料という「もの」史料に依拠しているため、資料収集は現地に行き現物から収集するというフィールド調査による研究が中心となる。

(2)このため、研究手法は、①調査研究による資料収集、調査の対象も出来るだけ多くの事例を集めること、フィールド調査においては非文字資料だけではなく関係者への聞き取りを行い音声及び画像による資料情報を収集すること、これと同時に関係する文書史料及び文献資料を収集することにある。

(3)戦争記念碑や戦歿者墓碑石の調査では、形状の物理的情報(測量を含む)と刻まれている全ての文字情報(金石文字)を収集するが、その手法は測量図面の作成と文字情報の筆写及びデジタルカメラによる電子式写真の形状と文字情報、並びにビデオカメラによる動画情報(形状と文字情報)、口述記録を筆写と音声並びに動画撮影による電子画像音声情報による。撮影は、人為的及び機械的事故を想定して、写真カメラ3台(内ビデオ機能付き2台)とビデオカメラ1台で同時に記録する。撮影画面は、遠景による立体輪郭撮影と、碑面の文字を撮影記録するが、文字の撮影は光の角度と石の種類及び摩耗度などの自然的条件に大きく作用されるために多方向と重層的な撮影密度による撮影が必要になる。また、戦歿者墓碑石の多くが軍用墓地や軍人墓地に集中していること、そこでの対象も第一次大戦と第二次大戦というように複数の戦争での戦死者が埋葬されていることから、一つの墓地乃至は墓苑では数千基の墓碑石があるため、かなりの数を撮影して墓碑石の文字情報を収集しなければならない

い。収集する分量は、物理的条件によるが、通常は特定のものサンプル的に採集するが、それ以外は全体の2割程度の墓碑石の文字情報を撮影する。このため、通常は一日凡そ電子情報で最大10ギガバイト程度(平均で凡そ8ギガバイト)が情報量として記録することになる。このため、容量の大きなハードデスクを用い、原資料として保存するが、これは飽くまでも保存が目的であるため第一次資料整理となる。そこでは、素情報資料の保存(撮影日分類)と紙媒体資料のスキャニングによる電子情報化によるなまデータ処理を行う。紙媒体のデータとは、筆写によるもので、そこには測量図面と文字情報とが記録されているため、紙媒体の記録は原本保存として処理するが、活用するためにスキャニングして電子情報化してハードデスクに保存しておく。

(4)このように、膨大な資料情報を用いて科学的手法で分析を行い実証的な研究をしていくことになるが、そのためには先ず分析を可能にするための第二次資料整理が必要になる。ここでは第一次資料整理において電子化した情報を国別・地域別・調査地・戦争別に分類整理するが、その際に筆写した電子情報を付き合わせる第一次加工を施す。しかし、これだけでは分析に供する状態にはなっていない。情報量が少なければ直接資料情報を用いることが出来るが、本研究において収集してきた電子化した資料情報は選別しない前の素情報だけでも4テラから5テラ分はあることから、第二次資料整理作業だけでは全く不完全である。このため、分析を容易にするための第三次資料整理を行うことになる。これが、電子情報化した資料から、文字情報を活字化するという翻刻作業となる。この作業は容易ではない。収集してきた文字情報が分量的に多いというだけでなく、多言語にわたるからでもある。

(5)本研究においては、現地における調査による資料収集と第三次資料整理までを中心に行ってきた。一部において、同時進行的に行い完全な資料的裏付けによる実証的研究の成果を纏め発表することが出来たが、それ以外は研究報告書として現状報告に留め、詳細で精確な分析による実証は、全ての資料情報が出そろった現段階で行っている。目標としては、凡そ半年を目処に資料分析を行いそれを基にして研究成果を纏め発表する。発表は、学術雑誌などにおける紙媒体での発表と、インターネットによる発表とを併せて行う。

#### 4. 研究成果

(1)ここでは、現在までに収集し第三次資料整理が完了した資料情報を基にした結論のみを述べ、それ以外はこれから執筆する論文に譲る。

(2)日本の戦争記念碑は、定説的になっている国民的戦争として行われた日清戦争ではなく、徴兵制軍隊として本格的に戦われた西南

戦争であったことを解明したことであった。このことが判ったのは、島根県松江市の松江城址公園に明治21年5月5日に建立された「西南之役雲石隠戦死者記念碑」の建立経過が明らかになったからで、まさしくこれが日本の戦争記念碑建立の嚆矢となる。そもそもこの記念碑は、籠手田安定県知事が「西南役十周年祭祀」を機に西南戦争に従軍して斃れた島根県出身の将兵を慰霊顕彰することを目的として島根県民に呼び掛け、県民運動として戦争記念碑建立されたもので、まさに国民国家における記念碑建立の成果であった。勿論、この運動が全県的なものとして展開できた背景には、徴兵制度の改正と徴兵制度を支援するための徴兵慰労会・徴兵義会・尚武会といったような在野の支援組織化という軍事的体制が築かれていったことがあったことはいままでもない。この記念碑の特徴は、かかる背景をもちながらも、それを没主体的に受け入れるのではなく、より積極的主体的に受け止め、県民運動として県民を動員して建立されたということにある。もっとも、西南戦争にかかわる記念碑は各地に建立されており、しかも県単位のものとしても和歌山県和歌山市岡公園に明治16年9月に建立された記念碑がある。これは、「記念碑 陸軍大将兼議長議定官二品大勲位熾仁親王書」と「四役戦亡記念碑側記 和歌山県令従四位勲三等神山郡廉」と刻まれた二基だが、松江の記念碑との違いは、旧藩主・旧藩士を忠臣としたもので、松江のような大規模な県民運動として建立されたものではなかった。つまり、松江の記念碑の特徴は、国民国家における戦歿者慰霊と戦争記念碑の典型的形態であることだ。

(3)さらに、松江の「西南之役雲石隠戦死者記念碑」が歴史的にみて重要なのは、この碑が県民運動の成果として建立されたということだけではなく、これが一般的概念としての戦争記念碑である民族主義や愛国主義に基づく近代国家の国民統合の象徴的建造物として建立されたのではなかったことで、そればかりかその反対極に位置する西南戦争という内戦と現政権(薩長藩閥政権)に対するアンチテーゼとして建立されたことにある。この記念碑の存在が日本の戦歿者慰霊と戦争記念碑が内戦を起点としたものであることになると、日本の戦歿者慰霊と戦争記念碑の研究は根本的な点から問い直していかなければならなくなるであろう。日本の特徴である国家が戦争記念碑を造ってこなかったり、国立の戦歿者墓地(軍用墓地ではなく)を造ってこなかったこと背景には、日本の軍隊が「国民軍」ではなく「天皇の軍隊」であったこと、真の国民国家にはなりきれていなかった、まさしく天皇制国家でしかなかったという国家の本質に関わっているというべきであろう。それは、徴兵制の維持(留守家族扶助)と戦死者取り扱い(葬儀・埋葬・供養・顕彰)及び遺族扶助のほとんどを地域

共同体に依存していたことからみることが出来る。このことは、国家責任として戦死者を取り扱ってこなかったことをも意味する。その結果、戦前期における日本の戦争記念碑も戦歿者慰霊も、国家という単位におけるものはなかった（天皇の股肱の臣に対する慰霊施設として靖国神社や振天府・懐遠府・建安府・顕忠府はある）が、犠牲となった兵士に対してはそれを送り出していった村落共同体単位により、戦死者を「村（地域）」の誉れとして祀り葬儀から慰霊・顕彰が行われていったのであった。それが、却って、下からの愛国主義的国家統合へと国民意識を醸成していったと考えられる。

(4)このようなことから、日本には各地の独特の記念碑が建立され様々な方法で戦死者が葬られてくるようになる。日本の戦歿者慰霊や戦争記念碑に統一性や画一性がないのは、これらが国からの強制によるものではなく、飽くまでも地域の自主性によるものであったからにはかならない。このことは、例えば日清戦争では全国的に戦争記念碑が建立されていくが、それは決して全ての地域ではなかったという現象にも繋がっていく。つまり、戦争記念碑が全国的に町村単位で建立されていくがそれは全ての町村ではなかった。このようなことは、地域の独自性と言うことに繋がっていくが、それが日本の特徴ともなっていく。つまり、論理的には日本という国家は個人が国家を支えるというのではなく地域が国家を支えるという構造からなりたっており、それが日本の戦歿者慰霊と戦争記念碑の特徴として表れてきているということになる。このことは、中国や台湾での戦歿者慰霊と戦争記念碑との著しい違いとしてみることが出来るが、それは世界史的に見ると異質なものであるとはいえない。

例えば、イタリアではローマに第一次大戦の戦死者を慰霊した「無名戦士の墓」があるが、これは下からの自然発生的な戦死者慰霊による全国的運動によって構築された慰霊の空間と表象物であるが、それとは別に戦場となったモンテグラッパには第一次大戦イタリア軍戦死者慰霊堂がレディプーリアにもイタリア軍戦死者墓地及びイタリア軍戦勝記念碑といったような国家的な構築物が造られている。基本的には、下からの戦歿者慰霊だけではなく、上からの戦歿者慰霊も不可欠であったことになる。勿論、下からの愛国主義的戦争記念碑の建立も併せて行われている。イタリアの各地には、地域共同体単位で記念碑や慰霊碑、戦死者墓地も造られ、さらに、第二次大戦後にはナチスドイツ時代ファシストによる犠牲者やパルチザン犠牲者の記念碑などさまざまなものが造られており、まさに重層的行動になっている。このような事例は、ギリシャでも同様で、アテネに無名戦士の墓があるとともに、地方にはギリシャ軍の造る戦死者墓地や慰霊碑・戦勝記念碑があり、各村には共同体構成

員の戦死者墓地と慰霊碑が建立されている。さらに、その慰霊碑の揮毫には様々な価値観による過去との拘わりに関する考えが刻まれ、決して一様ではない。

ドイツでも、国民国家における戦歿者慰霊と戦争記念碑を代表する事例と言われるライプツィヒにある諸国民戦争記念碑やヘッセン州リュードスハイム・アム・ライン近郊の丘の上にあるニーダーヴァルト・デンクマールは、まさしく国家統合の象徴的構築物として国家的規模で造られたものであった。その一方で、普仏戦争の戦死者から第一次大戦・第二次大戦の戦死者を祀る記念碑や慰霊碑が、さらに第二次大戦における犠牲者やナチスによる犠牲者、そして国家暴力による犠牲者に至るまで、地域共同体や各団体などによって記念碑（警告記念碑）や慰霊碑、さらに墓地といったものまで、まさしく重層的に造られてきている。それは、凱旋門に無名戦士の墓を刻むフランスでも同じである。

(5)このような、世界史的に見ていくと、戦歿者慰霊と戦争記念碑とは決して一方通行的なものでもなければ一つの顔であるわけではなく、さまざまな思い・主張・価値観によるものであることが判る。一般的な傾向としては、国家権力が強く国民強制による支配が貫徹している国では、画一化した傾向が見られる。それは、ファシズム期のイタリアや現代の中国、戒厳令下国民党支配の台湾に顕著にみられることから、国家の国民統制と深く関わっているといえよう。そのような中で、日本の戦歿者慰霊と戦争記念碑は特異な存在といえる。市民革命の経験を持っていない日本で、何故に戦前期に独自の戦歿者慰霊と戦争記念碑が多く存在していたのかを解明することが今後の課題であろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 22 件)

檀山幸夫「戦歿者慰霊と戦争記念碑の系譜—西南戦争戦死者慰霊—」(『中京法学』第 50 巻 3・4 合併号、2016 年、査読有、91-240 頁。

櫻井良樹「辛亥革命記念空間と観光施設—東南アジアとアメリカを題材として—」(『中国研究』第 23 号、2015 年、査読無、41-65 頁。

檀山幸夫「日本の官僚制度下における台湾総督府官僚について」(『第八届臺灣總督府檔案學術研討會論文集』、國史館臺灣文獻館・2015 年、365 頁～390 頁所収、台湾南投市、査読有)。

檀山幸夫「日本の外地統治機構と外地支配について—「植民地官僚」「植民地大学」論研究への問い—」(『台湾植民地史の研究』、ゆまに書房、2015 年、13 頁～80 頁所収、査読無)。

サーラ・スヴェン Nationalism and History in Contemporary Japan 日本におけるナショナリズムと歴史。Jeff Kingston (ed.): Nationalism in Asia. December 2015 (in print). 査読無。

サーラ・スヴェン Wakai no ayumi,

kotonaru Nichidoku (Processes of reconciliation, differences between Japan and Germany; interview article), Asahi Shinbun, 18 June 2015. 査読無。

本康宏史「「負の遺産」の伝え方」(井口貢編『観光学事始』法律文化社、P124~135) 2015年、編集有。

サーラ・スヴェン Naval Memorials in Germany and Japan: Narratives of a "Clean War" Represented in Public Space ドイツと日本における海軍・海戦関係の記念碑. The Journal of Northeast Asian History 11:1, 2014, pp. 7-43 査読無。

サーラ・スヴェン Japan und Deutschland im Ersten Weltkrieg 第一次世界大戦におけるドイツと日本 (Japan and Germany in the First World War). OAG Notizen 12/2014, pp. 10-45 査読無。

サーラ・スヴェン Bad War or Good War? History and Politics in Post-war Japan 良い戦争か悪い戦争か? 戦後日本における歴史と政治. Jeff Kingston (ed.), Critical Issues in Contemporary Japan. New York: Routledge, 2014, pp. 137-148. 査読無。

本康宏史「「軍都」と「植民都市」の慰霊空間 日台の招魂社をめぐる諸問題」(中京大学社会科学研究所・檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾 東アジアの国際政治と台湾史研究』中京大学社会科学研究所、P253~257) 2014年、査読無、編集有。

本康宏史「第九師団と軍都金沢」(河西英通編『列島中央の軍事拠点』吉川弘文館、P78~105) 2014年、査読無、編集有。

東山京子「日本帝国の台湾統治文書のアーカイブ」(『知と技術の継承と展開 - アーカイブズの日伊比較 -』創泉堂出版・2014年、109頁~145頁所収、査読無)。

東山京子「昭和一〇年台湾大地震の被災地における復興と慰霊 - 台湾総督府地方行政機関文書・専売局文書からの考察 -」(『社会科学研究所』第34巻第1号・2号合併号、中京大学社会科学研究所、2014年、67頁~133頁所収、査読有)。

檜山幸夫「近代天皇制国家の台湾統治 - 台湾人戦死者の靖国神社合祀問題を事例に -」(『近代東亜中の臺灣 国際學術研討會論文集』國立臺灣圖書館、2013年、164頁~187頁所収、台湾新北市、査読有)。

サーラ・スヴェン植民地統治と個人崇拜: 日本とドイツの植民地における銅像 (Colonial Administration and Personality Cult. Bronze Statues in Japanese and German Colonies). In: 『人文社会科学研究中心専書』(中央研究院 / Academia Sinica, Taiwan) 60, 2013, pp. 197-214. 査読無。

サーラ・スヴェン戦後の日本とドイツにおける「過去の克服」(Coming to terms with the past in postwar Japan and Germany). In: 『日本の科学者』(Journal of Japanese Scientists) 48:8, 2013, pp. 18-23. 査読無。

檜山幸夫「帝国日本の戦死者慰霊と靖国神社 日本統治下台湾における台湾人の靖国合祀を事例として (中の甲)」(『社会科学研究所』第32巻第2号、中京大学社会科学研究所、2012年、165頁~268頁、査読無)。

東山京子「中華民國台湾における文書管理」(『社会科学研究所』第33巻第1号、中京大学社会科学研究所、2012年10月、85頁~141頁所収、査読有)。

檜山幸夫「帝国日本の戦死者慰霊と靖国神社(上) - 日本統治下台湾における台湾人の靖国合祀を事例として -」(『社会科学研究所』第31巻第1号、中京大学社会科学研究所、2011年、37頁~171頁、査読無)。

②櫻井良樹「ワシントン会議後の支那駐屯軍」(檜山幸夫編『帝国日本の展開と台湾』創泉堂書店、2011年、559~589頁) 査読無。

②東山京子「帝国の崩壊と台湾総督府の敗戦処理」(檜山幸夫編『帝国日本の展開と台湾』創泉堂書店、2011年、215頁~269頁、査読無)。

〔学会発表〕(計1件)

檜山幸夫「近代天皇制国家の台湾統治 - 台湾人戦死者の靖国神社合祀問題を事例に -」(『近代東亜中の臺灣 国際學術研討會、國立臺灣圖書館、2013年3月15日16日、台湾新北市)。

〔図書〕(計1件)

櫻井良樹『華北駐屯日本軍—義和団から盧溝橋への道—』(岩波現代全書074) 岩波書店、2015年、全294頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

檜山幸夫 (HIYAMA Yukio)

中京大学・法学部・教授

研究者番号: 40148242

### (3) 連携研究者

櫻井良樹 (SAKURAI Ryoju)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号: 90211268

サーラ・スヴェン (SAALER・Sven)

上智大学・国際教養学部・准教授

研究者番号: 90211268

松田京子 (MATSUDA Kyoko)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号: 20283707

松金公正 (MATUEKANE Kimimasa)

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号: 50334074

本康宏史 (MOTOYASU Hiroshi)

金沢星稜大学・経済学部・教授

研究者番号: 80711374

東山京子 (HIGASHIYAMA Kyoko)

中京大学・社会科学研究所・研究員

研究者番号: 80570077